

80年アフリカ・インド日食の旅事情(1)

木村 精二

来年2月16日(土)に見られる皆既日食の予報データと気象条件について、塩田氏がすでに詳しく発表されております。(日食情報1978年1、P2「1979～1984年の皆既日食」)。それによると、多くの点から見て大変に条件がよく、一度はキレイなコロナを眺めたいとお考えの方も、この次にはまともな協同観測をやりとげたいと決心されているプロ級の人にとっても、食指を大いに動かさましょう。

アラビヤ海をへだててアフリカ大陸とインド。そのどちらも互にほとんど遜色のない好条件というのですから、選択するに当っては、観測者の経済的事情・時間的余裕・観測地とその近辺への好みなどにウェイトを置く、ということになります。今回は身近な方、つまり行き易さの点で軍配の上がる(くだいていえばオカネとヒマが少なくて済む)インドへの観測旅行計画を立てる方への参考インフォメーションを書きます。

インドへの足と運賃

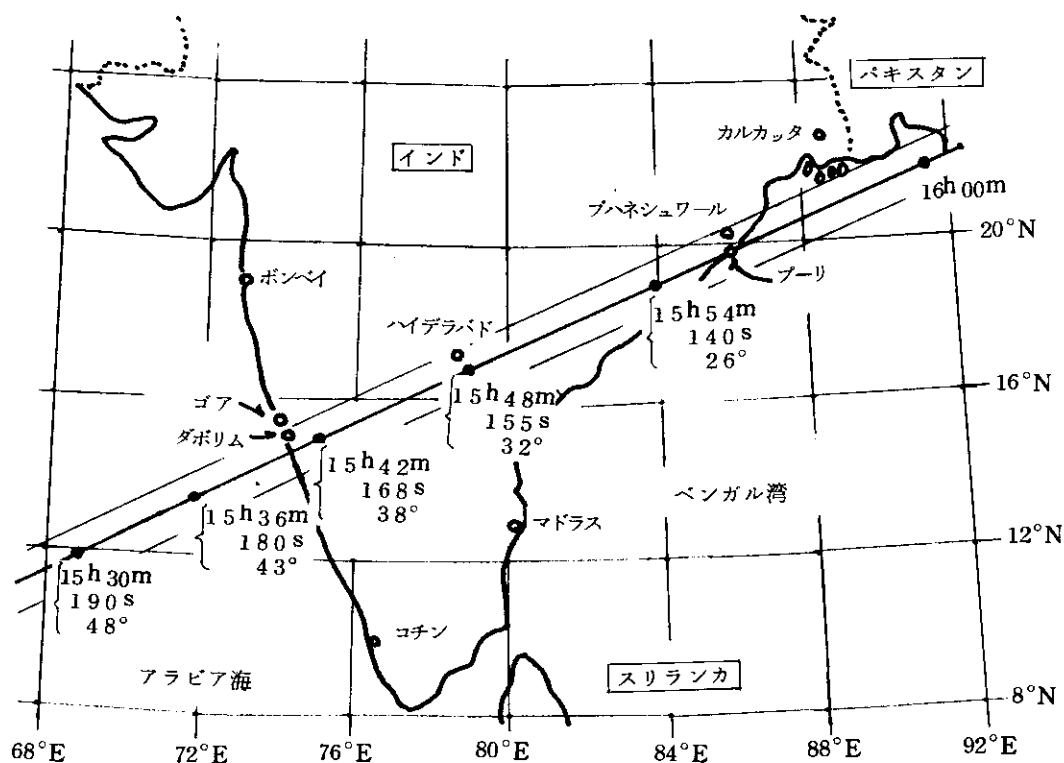
日本から南廻りでヨーロッパに行く途中の大国インドには、日本航空とインド航空のほか、英国航空をはじめ欧州各国のキャリアが乗り入れています。到着都市は首都デリー以外に東端のカルカッタと西海岸のボンベイ、逆になりましたが出発は東京または大阪発です。相互平等乗り入れの原則により、便数などの点から日航とインド航空が他より優れていますが、この二者のいずれを選ぶかとなれば、断然後者です。理由は、到着地から国内航空に乗り継ぐときの利便さから、とだけにしておきましょう。

次に申し上げるのは、時刻表・航空料金ともにこの冬現在のものですから、1年後には多少の変更があることをご承知ください。時刻表はインド航空(及び同国内航空)のみを扱います

が、料金はどこの飛行機でも同一（のハズ??）です。

さて、皆既食の見える地域（インド国内に限る）をもう一度復習しておきましょう（別図参照）。同国を斜めに横断する3本の平行線が皆既帯で、真中が中心線、その上下が北限界線と南限界線です。中心線に食甚時刻を世界時より5.5時間おくれの現地時刻（暦表時）で6分毎に示し、それぞれの地での皆既食継続時間と太陽高度を添えました。

1980年2月16日皆既日食帯（インド方面）
 { 現地（インド）時刻
 皆既継続時間
 太陽高度



皆既時間が長くて太陽が高い、しかも天気がもっとも良い、というのが西海岸で、ためらうことなくゴアから南へ数十Kmほど下った地域となります。ここを観測地と決めれば、日本からの往路は次のとおりです。

2月14日(木) 昼過ぎ東京発、真夜中にボンベイ着、15日(金) 午前中に同空港から国内線で50分、400Km離れたダボリム・ゴア空港へ、ここからただちに車で皆既帯へ入り、日の暮れない内に観測地決定、翌日の本番にそなえる。

という計画では、あまりにせわしないとお考えならば、2月12日(火) 昼過ぎに大阪発、真夜中にボンベイ着、翌13日(水) はゆっくりと休息又は観光、そして14日(木) の午前中にゴアへ飛び、車で皆既帯へ。次の日(15日) は観測準備に当てて、16日の本番をむかえる。ということになりましょう。

いずれの場合も往復の航空運賃は、全くの個人で35万円、15人以上の団体なら19万円と大巾に下ります。

皆既時間・太陽高度など天文学的条件が多少悪くなっても、天気の可能性があまり変らなければ、もう少し近い所で……と思っている人は、カルカッタの南西方も候補地に選べましょう。つまりこんな具合です。

2月12日(火) 昼過ぎに大阪発、同夜カルカッタ着、深夜になるまえにホテルで就寝、翌13日(水) は同市の観光、14日(木) の午前中に定期便の小型機に乗って1時間半近く、400Kmはなれたブパネシュワールへ。ここから皆既帯の中心プーリまで数十Km、車で1~2時間。翌15日(金) に観測準備、16日に日食。

このようにカルカッタに入る場合は、他のキャリヤ(例えばバンナムで14日発) を使わない限り、12日よりおそくは出発不能です。

上記の場合の往復運賃は、個人、団体ともボンベイ入りと比べて1割程度しか安くなりません。

さて帰り路ですが、14日に出発して西海岸に陣どり、日食観測さえ終われば、すぐにも帰り仕度を、という人は、17日(日) にゴアからボンベイへ飛び、同夜の便で日本へ向かえば、18日(月) の昼には東京着です。タッタの5日、いや正味4日間! しかしこれではよほど忙しい人以外はモッタイない話です。日食でもなければ、行く機会の少ないインドに足を踏み入れたのですから、少し遊びませんか。日食は先ず晴れる可能性が大ですから、もう現地では天文から離れてもよろしいではありませんか。

インドは歴史と遺跡の国

それではインドの西の玄関ボンベイから始めましょう。”良き港”を意味するこの港町は16世紀のポルトガル人の手になるもの。現在の人口は600万。パリの凱旋門に劣らぬ威容を誇る歴史的記念碑ゲイトウェイ・オブ・インド、プリンス・オブ・ウェルズ博物館、沈黙の塔などは必見の建造物でしょう。10キロほど足を伸ばせば、ヒンズー教のエレファンタ洞窟寺院があります。

日食観測の第1候補地に近いゴアも良港で、数百年の昔から回教徒がメッカ詣でに出港したといわれます。16世紀中ごろに来日したフランシスコ・ザビエルの遺体が安置されているボム・シーザス教会はぜひ訪ねたいところ。日本とは関係が深く、近郊で採掘される鉄鉱石の多くは日本に輸出されます。海水浴場も設備が良く、時期によっては世界中からヒッピー族も集まるとか。

ボンベイからゴアとは反対、つまり北へ1時間余り飛ぶとケショッド、この近くに広大なギル森林国立公園がありますが、ここはライオンの生息地としてアジアで唯一の地といわれています。ハイエナ、チータなど多岐に及びアフリカより動物の種類が多いインドという宣伝もあながち間違っていないそうです。

カルカッタは最大の都市で、17世紀には小村落でしたが、以後急速に貿易の中心地として発展し、現在では製紙・製鋼などの工場も多い商工業都市です。今世紀初めに建設されたビクトリア・メモリアル、18世紀の城塞フォート・ウィリアムは特に著名。ジャイン寺院、ナクホダ回教寺院、ダクシネスワール寺なども訪ねておくべきでしょう。

日食観測の第2候補地プーリは、12世紀に建立されたジャガナット寺に宇宙の神を祀っていることで有名です。夏に行なわれる祭りにはヒンズー教徒の巡礼者たちがこの小さい町に20万人も集まるとか。

プーリの北60キロにあるのが上述したブバネシュワールです。ヒンズー教徒しか入ることを許されないリングラージ寺とラジラニ寺の中には、エロチックなレリーフが人目を引くといわれます。

ブバネシュワールに程近く、コナラークという町があります。ここにも世界的な遺跡が残り、特に「太陽の寺院」の中の”太陽の戦車”は、天空を駆る太陽の神を想像したもので、24の車輪と7頭の馬を彫った精巧な彫刻で飾られています。風格の高い男女の姿態も描かれているということですから、ぜひ訪ねるべきでしょう。

お釈迦さまの生れ故郷インド、長い長い歴史を秘めた新興国、世界に誇る無数の遺跡を持つ

この国の、たまたま皆既帯の通る近くのごく一部に触れました。さらに1時間ほど飛ぶか数時間のドライブ・汽車の旅を日程に組み込めば、観るもの・学ぶ対象にこと欠かないでしょう。大ざっぱな費用は、食事と宿泊に1日1～1.5万円、それに移動の足代を加え、さきに記した日本からの往復航空運賃を合算すれば、旅行の総経費が求まります。

知っていて損しないあれこれ

外国に行くのにどうしても必要なものはパスポート。それに加えて、アメリカ・ソ連・中国などの超大国と発展途上国の多くはビザ（査証）を要求されますが、インドは28日間以内は必要ありません。予防注射は残念ながらコレラと天然痘が必要です。

通貨はルピーで約30円、補助単位としてパイサ（1/100ルピー）。持ち込み外貨は申告すれば制限ありませんが、インド貨幣の持ち出しは禁止されています。

総人口は6億人、15の言葉があり、公用語はヒンズー語、英語は準公用語。面積は日本の10倍という広さ。

国内航空の営業路線は3.5万Km、「ディスカバー・インデア」は乗り放題の切符で14日間有効で約4万円。国鉄の営業キロは6万Kmに近く、欧州のユーレイルパスに相当する「インドレイルパス」を買えば汽車の愛好家にとっては大変に有利でしょう。ただし十分に時間的余裕をみておく必要があります。

ムジュール・パールト・パサンド・ハイ。アワシヤ・アーイエ！（インドはすばらしいところです。ぜひおいでください）